

<b>Title</b>	河島茂生氏による「思考を意動かす学習デザイン：認知、学習、そして図書館」報告（2014年第2回アクティブ・ラーニング研究会）
<b>Author(s)</b>	鈴木, 幸
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :45-46
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5267">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5267</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 2014年度第2回アクティブ・ラーニング研究会 河島茂生氏による「思考を動かす学習デザイン： 認知、学習、そして図書館」報告



河島茂生准教授（発題者）

2014年12月15日（月）聖学院大学4号館4階第1会議室において、2014年度第2回「アクティブ・ラーニング研究会」が開催された。今回は聖学院大学政治経済学部准教授の河島茂生氏より、前半は標記の題にてご報告いただいた。後半は同氏にコーディネーター役を務めていただき、参加者全員でグループ・ワークを行なって、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の浸透方法について議論を交わした。参加者は18名であった。

河島氏の報告は、ALが推進されるようになった背景の説明から始められた。ALは、教員が一方的に講義する授業に反して、学生が主体となって行われる授業・学習形態である。そもそも伝統的な「知識伝達型教育」では、教える分野の専門家であり研究者である教員が、自分の持つ知識を学生にそそぐことで、学生は教員の知的構造を追体験することができると考えられてきた。しかし、近年では基礎学力不足の学生や、集中力が長く続かない学生も多く見られることから、講義型授業の見直しが必要になった。また、専門知識よりも汎用的技能を身に付けることの必要性が問われ始めた

め、従来の知識の伝達・注入型授業から、教員と学生が意思疎通を図り、相互に刺激を与えながら成長できるとされるALを用いた授業が推進されるようになったのである。

続いて、大学図書館に訪れた変革についても報告された。その変革の原因となったものは、サーチエンジンや各種データベース、電子ジャーナルの普及である。その結果、図書館に行かなくても情報収集ができるようになったことから、場としての図書館の物理的な意味が問われ始めたのである。そこで、学生がどのように図書館を活用し過ごすかを考慮することが重視されるようになり、ALを行なう場としてのラーニング・commons（以下、LC）が設置されるようになった。

河島氏によると、2013年の時点で、日本の306大学がすでにLCを設置しているという。英語の“commons”という言葉が示すように、複数の学生が集まって、コンピューター設備や電子情報資源、印刷物を活用するだけでなく、人的支援も受けられる学修の「場」である。河島氏は、D. ビーグルとS. マクマランのLC定義を紹介し、大学の授業と関連させて、授業外の課題を行なう場としてLCが設置されることの重要性を報告された。

また、ALを支える学習観として、構成主義の概念が紹介された。知識とは受動的に受け取られる



グループ・ワーク風景

ものではなく、能動的に組み立てられるものであるという。そして知識を得るには、1人でできることもあれば、他者の助けがあって初めてできることもあり、他者のアドバイスのによって学びがより広がることもある。それも有能な人すなわち教員とともに考え、その考えを分かち合うことが大切であることから、ALとの関連性が紹介された。

後半のグループ・ワークでは、ALを積極的に導入する場合、どのような方策をとれば本学全体に浸透するか、というテーマで議論が交わされた。本学ではすでにLCや図書館のアクティブ・ラーニング・スペースといった施設は整えられているが、しかし具体的にそれらを利用した学修のプログラム化は成されていない。そこで、教員の評価制度の見直しや、教育に力を入れる教師の必要性、閉鎖的な授業を見直すための情報共有・授業紹介、初年次教育の重要性といった問題が提起された。また、特に聖学院では共同作業を苦手とする学生や基礎学力不足の学生をサポートする必要があることが挙げられ、本学ならではの面倒見の良さや少人数制を活かせるようになれば良いのではないかといった意見が出された。また、教職員同士のさらなる横のつながりの必要性和困難さ、そしてALを実行する価値について等、短い時間であったが熱い議論が交わされたことを記しておきたい。

(文責：鈴木 幸 [すずき・みゆき] 聖学院大学基礎総合研究部ポストドクター)